



日出学園の品格

市川の名門校がはぐくむもの

日出学園は、1934年に市川在住の有志により設立された。
以降、市川の名門校として地元で愛され続けている。
校訓である「誠（心を重んじる教育）・明（自主的、積極的な明るさをつくる教育）・和（ともに力を合わせる大切さを学ぶ教育）」の3つの柱に基づき、生徒一人ひとりをていねいに育ててきた足跡は、保護者から絶対の信頼を得ている。



オーストラリアの姉妹校セントポールズ・アングリカン・グラマースクールから研修生を受け入れ、日出学園の生徒も8月に同校へ



「友達と話していて、ふと思いました。友達って何なんだろう？ 今って空気を読んで動かないやいなところがある。そこで本当の友達って言えるのか。いろいろ考えたんですが、自分なりの答えが出せなくて、みんなの意見を聞いてみたい」という女子生徒の発言のもと、ディベートが始まった。放課後に、希望者で行われる「コミュニケーション・ディベート」。先生も輪に加わり、自分たちの経験も交えながら、活発な議論が繰り広げられた。「あるテーマについて議論を重ね、戦うのではなく積み上げていく。例えば「死刑制度」をテーマに、死刑制度から死を考える。テーマそのものだけで完結しないものを取り上げています。今後、このような双方向型の授業が主力になっていくだろうと思っています。また、生活指導や進路指導を行う上で、ある行動に対し、私はこう思うけどあなたは違うのかな？ とか、進路を選ぶ際に、何を基準に自分の幸せや将来を考えていくのか。そういう根本的な話を本来はしていかなければならない。だから、こういう場で自分の意見を言って、自分と向き合うことは大事なことでと思います。」「コミュニケーション・ディベート」の名付け親である能見太一郎教師はこう話す。参加していた深山枝愛さん（高一）は「自分と違う価値観を自分のなかに取り入れて、ああ、そういう考えもできるんだって自分を高めていくことができるのが楽しい」。東原直哉君（高三）は「話すことによって、自分の固定概念が取り払われます。このディベートに参加したことで、社会学を学びたいと思います。また、どんなことでも、何で自分はそう思うんだらうと考えるようになりました。ディベート終了後も、残ったメンバーが小さな輪になり議論を続けていた。

21世紀の寺子屋
校内を歩くと、さまざまな場所で堤雅義校長の姿を見かけた。「最低でも1日1回は校内を回りますよ。やはり生徒の様子が気になりますので」。寺子屋のような少人数で生徒の個性を伸ばす教育を目指し設立された同校には、今でもその文化が息づく。中2からの英語、数学は20名程度の少人数での習熟度別授業を行っている。「自分に合ったペースで教えてもらえるのでわかりやすいですし、上を目指そうと競争心が生まれます」と生徒たち。高2、3のフロアには小教室がいくつも存在する。ここでは、多様な大学の入学試験に対応するため、多種多様な講座が開講されている。職員室前の質問スペースは、先生に質問のある生徒や面談を行う生徒たちでこたえ返している。そんな生徒の意欲に応えるため、今年度から「学習クラブ」という名の補講を開始した。また、ノート点検を頻繁に行い、返却時には先生のコメントが添えられる。「生徒から悩み相談が書かれていることもあります」と堤校長。面見が良いと定評があるゆえんだ。「でも、面見が良いと思ってもいけないと思うんです。学習面においても行事においても。徐々に生徒に任せる領域を増やしています。生徒にとって自信になると思えますし、その達成感が次のステップにつながると思っています。失敗したら失敗したで得るものがあるし、めげないのが中高生。めげたら、めげたでこちらがフォローすればいいんです。そして、その経験を生徒から生徒へ引き継ぐ流れができればいいと思っています。いろんなところへ飛び出し、発信できる生徒になってもらいたいですね。それが、今、社会で求められているものでもあります。」
生徒たちに声をかける。こちらを見つめる眼差しから、すっと心を開いてくれた様子が読み取れる。「男女、年齢を問わず仲がいいし、先生もやさしい」と話す生徒たち。あたたかな空気に包まれて、自分らしくまっすぐに過ごす6年間。体もココロも大きく育つ6年間となる。



堤雅義校長